

2024 年度前期・後期 授業改善アンケート集計結果に対するコメント
—文芸学部

学部長 木下 誠

2024 年度の文芸学部では、教育的効果の観点から一部授業をオンラインで開講しつつ、原則として教室での対面形式にて授業を実施しました。

以下、2024 年度授業改善アンケートを、2023 年度の結果と比較しながら見て行きます。設問 1 と 2 は、学生たちの授業への取り組み姿勢についてです。設問 1 の欠席回数と設問 2「この授業を理解するために努力した」の回答は、前年度とほぼ変わらない数値であり、良い結果が続いています。なかでも設問 2 の回答は「4」よりも「5」が多く、後者のポイントが前年度からさらに伸びて 48.8%となっているのは、授業にのぞむ学生たちの積極的な姿勢を表しており、高く評価できると考えます。

設問の 3 から 10 は教員に対する評価です。全体的に前年度から大きな変化はありません。いずれも 4.5 前後の高い数値を示しています。設問 8「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促していた」と設問 9「教員は質問への回答や課題の返却・解説等を十分にしていた」を比較すると、前年度から引き続き、設問 8 の評価が若干低めですが、これは文芸学部の学問・教育内容の特徴を反映していると考えられます。教室内でのその場の反応よりも、授業全体を踏まえた上で、学生が個々にしっかりと思考した後に、各授業終了時のレスポンスシートや授業時間外での課題等に取り組む姿勢を重視している、ということです。それでも、設問 8 は前年度から 0.06 ポイント平均値が上がっています。また、設問 9 の評価の高さからは、教員が十分にフィードバックをして教育効果をあげようとしていることが伺えます。学生の皆さんもそのような授業の特徴を理解している回答結果であると考えます。

設問 14「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」は、4.42 と高い数値であり、回答「5」と「4」を合わせて 90.1%に達しています。すなわち、9 割の学生が授業内容に満足しており、高いレベルで教育・研究上の価値が認められていることを示しています。この設問 14 と比較的高い相関関係を持っているのが、設問 12「この分野への興味・関心が引き起こされた」と設問 13「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」です。両方とも平均値は「4.29」であり、前年度とほぼ同じ水準となっています。レベルが少々高めの授業もあるかもしれませんが、それは学生の皆さんの潜在能力を引き出すための、教員による期待の高さの表れとして理解してほしいと思います。なお、学生が感じる授業の充実度としての設問 12 と設問 14 の評価は、ともに大学全体の平均をうわまっており、4 学部の中でもっとも高い数値です。

「この授業で用いられた授業手法にすべてマークしてください」という質問から分かるのは、文芸学部では、「質疑応答」「学生によるコメントペーパー」「プレゼンテーション」「グループワーク」「ディスカッション」の手法を取り入れている授業が、大学全体の平均よりも少し高いことです。なかでも「学生によるコメントペーパー」「グループワーク」は、前年度よりも回答率が高くなっており、学生の反応を見ながら積極的な参加を促していることを示しています。

「授業を通じて身についた資質・能力」についての設問では、文芸学部においては、「この分野の知識、学力」「言語運用能力」「構想力」が全体平均よりも高いのが例年の特徴で、今回も同様の結果を示しています。そのほかに、「柔軟な発想力」「俯瞰力」「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」が全体平均をうわまっています。これらの結果は、演習形式の授業やゼミ等における取り組み、特に卒業論文執筆のために必要な能力育成に関して、十分に教育効果があがっていることを示しています。

以上